

## 1～2章

日本人は資格よりも場を優先する。記者、エンジニア、といった資格よりも、朝日新聞の記者といった所属する会社の方が重視される。

外国人は、二つ以上の集団に所属して、そのすべてを大事にすることができるが、日本人は共同体の参加を要求が多いため、一度離れると元の関係に戻るのは難しい。

## 3章

能力のある者には、より多くの仕事、重要な仕事を負担させられ、同期の中では昇進が早い、集団内の関係は親子のように「タテ」に繋がりがやすく、兄弟、姉妹のような「ヨコ」の関係は弱い。

## 4章

日本人は、たとえ貧乏人でも、成功しない者でも、教育のない者でも、そうでない者と同等に扱われる権利があると信じこんでいる。日本では「タテ」の上向きの運動が激しい社会。

## 5章

この組織に新しく人が加入すると全員に影響があり、全員の承認が必要となる。人間関係よりルール自体に忠実になることで集団構成の基盤ができる。

## 6章

日本のリーダーは、どんなに能力があっても、自由に組織を動かすことはできない。リーダーは直接の幹部を通さないと成員を動かせず、幹部たちの力関係の調整には、相当なエネルギーを使わなければならなくなる。

## 7章

人と人との関係を何より優先する価値観は、宗教的ではなく道徳的である。対人関係が自己を位置づける尺度となり、自己の思考を導く。「みんながこうしているから」「他人がこうするから」という考えで自己の行動が決まり、他人の行動を規制する。

## 感想

1967年に出版された本書。今の時代も日本人の性質、本質的な部分は変わっていないのだなと感じた。

例えば、アルバイトなどがあがる。